北海道・札幌冬季競技団体連絡会議　議事録

日　　時	令和７年８月７日（木）10時30分～12時00分
場　　所	札幌市役所本庁舎 18 階　第二常任委員会会議室
議　　題	⑴　さっぽろスノースポーツパーク2026への協力について ⑵　ウインタースポーツ振興に向けた取組について ①北海道のウインタースポーツに関する取組など【北海道】 ②冬季国際大会誘致について【札幌市】 ③子供のスポーツ振興の取組について【札幌市】 ④ウインタースポーツシティ施設整備計画について【札幌市】 ⑤意見交換
出 席 者	別添のとおり
配布資料	別添のとおり

発言者	発言要旨
１　開　　会	
枝元課長	本日はお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。ただいまより「北海道札幌冬季競技団体連絡会議」を開催させていただきます。 私は進行を務めさせていただきます、札幌市スポーツ局スポーツ都市推進課長の枝元と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。 はじめに、皆様のお手元に配布しております資料の確認をさせていただきます。 ・議事次第 ・資料１　座席表 ・資料２　出席者名簿 ・資料３　議題資料 ・資料４　参考資料（北海道・札幌冬季競技団体連絡会議設置要領） 以上、５点です。もし不足がございましたら、お手を挙げていただければと思います。 それでは、はじめに、当会の会長でございます勝木会長よりご挨拶を頂戴いたします。勝木会長、よろしくお願いいたします。
２　勝木会長あいさつ	
勝木会長	ただいまご紹介いただきました勝木でございます。ご多忙の中、このように多くの方にお集まりいただき、ありがとうございます。 本会議の発足当時の考え方について少しお話したいと思います。札幌市は「スノーリゾートシティ構想」を進めており、それと並行して「ウインタ

	ースポーツシティ」を推進していきたいと考えています。これは世界的にも期待されている構想です。 ６月にIOCのバッハ会長が来日され、橋本会長とお話をする中で、北海道・札幌への期待が大きいというお話がありました。こうした経緯もあり、橋本会長はJOC会長を引き受けることになりました。 スポーツを通じた街づくりとして、国際大会の誘致を進めています。例えば、スキー連盟が開催しているワールドカップやコンチネンタルカップのような世界大会が、すでに７～８つあります。来年はスノーボードのハーフパイプ、その後にはアルペンのワールドカップの開催も検討しおります。多くの外国人が来道する中で、これらの大会を行っていきます。子どもたちも非常に期待しています。 こうした取り組みは、すべてのウインタースポーツ競技に関わるものです。競技団体と連携しながら、例えばスケートやカーリングの大会を、この会議を通じてみんなで応援していきたいと考えています。 札幌市も北海道も、この会議の重要性を認識しています。今後も継続していきたいと考え、本日皆様にお集まりいただきました。 本日は、まず札幌市からいくつかの議題についてご説明をいただきます。その後、各団体の方から現状や今後の希望をお伝えいただき、全員で共有し、連携を深めていきたいと思います。ぜひともご協力をお願いいたします。 簡単ではありますが、私からのお礼のご挨拶とさせていただきます。
枝元課長	勝木会長、ありがとうございました。続きまして、事務局を代表しまして、札幌市スポーツ局長、奥村よりご挨拶させていただきます。奥村局長、よろしくお願いいたします。
３　奥村局長あいさつ	
奥村局長	ご紹介いただきました札幌スポーツ局長の奥村でございます。本年4月に着任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。 お忙しい中、皆様には本日お集まりいただき、本当にありがとうございます。少し暑い会議室かと思いますので、適宜水分を補給しながらご参加いただければと思います。 本会議につきましては、勝木会長からも趣旨のご説明がございましたが、「ウインタースポーツ振興」をしっかりと進めていくという目的で開催させていただいております。もともとはオリンピック・パラリンピック招致に向けた連絡会議から始まった活動です。その延長として、アスリート育成や競技人口の拡大は今後も非常に重要なテーマとなります。札幌市と、事務局として参加していただいている北海道庁が一体となって、ぜひ活発な意見交換や議論ができればと思っております。 札幌市としても、裾野拡大に向けたご支援や、スポーツ施設の整備を含む環境向上に対する様々な取り組みを進めてまいります。皆様におかれまし

	ては、本日、競技力向上や大会誘致活動について、それぞれの団体の取り組みや今後の展望を積極的にご意見、情報共有していただき、「オール札幌」「オール北海道」での活動強化を図っていければ、事務局としても大変嬉しく思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。
枝元課長	ありがとうございました。 それでは、ここからの議事進行は勝木会長にお願いしたいと思います。勝木会長、よろしくお願いいたします。
４　議　　事　　⑴　さっぽろスノースポーツパーク2026への協力について	
勝木会長	私の方から進めていきたいと思います。まず、議題１「札幌スノースポーツパーク2026への協力について」、事務局の方からお願いします。
中田部長	資料３に基づき説明
勝木会長	関係している私の方からも補足させていただきます。 2020年、大通公園の５丁目から10丁目の外側と内側を利用し、雪まつり後の雪で街中にクロスカントリーコースが作れないかという実証実験を行いました。ちょうどコロナ禍が始まった頃で、大規模なPRはできませんでしたが、市長や橋本さん、原田会長、経済界の方々が皆で走り、その後子どもたちとパラリンピック選手が練習を再開するという形で行いました。 その際、歩くスキーのレンタルを無料で行ったところ、観光客176人が参加されました。この経験から、雪まつりや観光の視点を、私たちスノースポーツ団体として絶対に外してはいけないという思いがあります。昨年から雪まつりとの連携を考えて企画を進めているところです。 街中で通行止めを行うのは難しいため、豊平川やドームでの開催など、様々な場所で実証実験を重ねています。昨年はバイアスロンのレーザー銃が面白い、カーリングが面白い、など多くの人が体験してくれました。これは子どもたちの普及活動に大きく貢献するものと期待しておりますので、ぜひご協力をお願いしたいと思います。また、オリンピアンも参加して色々なことを教えてくれています。 この話題はよろしいでしょうか？では、次の話題に移ります。
５　議　　事　　⑵　ウインタースポーツ振興に向けた取組について	
勝木会長	議題２「ウインタースポーツ振興に向けての取り組みについて」、まずは北海道からお願いします。
中村主幹	①北海道のウインタースポーツに関する取組など【北海道】、資料３に基づき説明
勝木会長	ありがとうございました。続きまして、冬季国際大会の誘致について、札幌市の方からお願いします。
中田部長	②冬季国際大会誘致について【札幌市】、資料３に基づき説明
勝木会長	ありがとうございます。これもこの会議の必要性を感じています。ある競

	技によっては、ワールドカップのような国際大会を開催できないと、運営能力が維持できないということもあります。ウインタースポーツの競技会全体で、そのお手伝いをする環境を作っていかなければ難しいだろうと思っています。大会を誘致したいという思いがあれば、もちろん札幌市と相談していただき、必要に応じて競技団体として協力していきたいと考えております。 　では、続きまして、子どものスポーツ振興の取り組みについて、札幌市からお願いします。
金谷部長	③子供のスポーツ振興の取組について【札幌市】、資料３に基づき説明
勝木会長	ありがとうございました。では、次、議題４、ウインタースポーツ施設の整備について、札幌市からご説明いただきます。
荒木部長	④ウインタースポーツシティ施設整備計画について【札幌市】、資料３に基づき説明
６　意見交換	
勝木会長	ここから意見交換の場としたいと思います。各委員の方々から、各競技団体として今後の活動や展開についてご発言をいただければと思います。
石川委員	北海道ボブスレー・スケルトン連盟の石川でございます。本日はありがとうございます。このような会議が開かれることは、我々連盟にとっても大変ありがたいことです。 　今日申し上げたいのは、藤野のコースを活用しない限り、日本におけるボブスレー・スケルトン・リュージュ競技が消滅してしまうということです。 　現在、大学でこの競技を行っているのは北海道大学のみです。仙台大学はボブスレーをやめてしまいました。北大は、コースがなくても毎年入学生の中に「ボブスレー部に入りたい」という学生が必ずいます。北大はボブスレー発祥の大学であるという自負と、OBの活躍もあり、この灯を消してはいけないという思いがあります。 　長野のコースは将来的に機能しないことは皆様ご理解されていると思いますが、そうなると手稲の復活も難しい状況です。以前、道庁も鑑定されていたはずですが、手稲のコースではなく、札幌市さんが管理されている藤野のコースを拡張すれば、ボブスレーの国際競技ができるということも、我々土木関係者で調べ、可能性は十分にあることがわかりました。 　しかし、リュージュやスケルトン、ボブスレーの人口が減少する中で、札幌市が多額の費用を投下して、市民が滑れる状況にしていただけるのか、長年陳情していますが、なかなかうまくいきません。 　以前、大通公園で「子どもボブスレー」やタイヤで滑るスケルトンの体験会を行いました。数年前、コロナ以前に北大や関連会社などで子どもボブスレーを数台作りましたが、その後お声がかからず、お蔵入りしています。しかし、体験会では子どもたちが何時間も並んで乗る状況で、１日で700人近くが乗ったこともありました。そり競技は、北海道の子どもたちにとって最

	初の遊びの一つだと思うのです。これを何とかして活かしていきたいので、札幌市には、藤野のコースについてもう少ししっかり考えて、施設のことをお願いしたい。
原田委員	北海道スキー連盟の原田と申します。よろしくお願いいたします。 先ほどお話がありましたが、北海道スキー連盟としては、今後、施設の整備を通じてスキースノーボードの強化に努めていきたいと考えております。 大倉山・宮の森ジャンプ競技場は、ラージヒルの隣にノーマルヒルを併設する「デュアル化」の計画を進めています。現在は離れていますが、２つのジャンプ台を並べることで、双方を使い分けた練習が可能となり、選手の育成において非常に有効です。トップ選手の高い技術に触れる機会も増えます。 大倉山にあるNTC（ナショナルトレーニングセンター）の強化拠点の選手も、移動の負担なく練習できるようになり、コーチや関係者の負担も軽減され、より良い練習や指導に専念できる環境が整います。他にも、大会運営の効率化や整備費の維持・低減といった効果も期待できます。 2028年のFIS（国際スキー連盟）公認更新を見据え、ラージヒルの改修をまず行い、ノーマルヒルの併設に取り組んでまいります。環境保全にも配慮し、伐採などの問題にも直面しますが、札幌市の皆様と協力して計画を進めていきます。デュアル化は選手や競技にとって非常に大きなメリットがありますので、市民の皆様のご理解もいただきながら、ぜひ協力して進めていきたいと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。
勝木会長	補足をさせていただきます。実は一昨年、全日本スキー連盟の理事会が札幌で８月に行われました。翌日、大倉山で若いジャンパーに飛んでもらいました。すると、そこに来ていたインバウンドの観光客が皆集まってきて、拍手を送って応援してくれました。 デュアル化によって、ノーマルヒルでは年間を通じて練習ができ、調子の良い時はラージヒルに移って練習するという体制を整えたいと考えています。そうすれば、観光の目玉である夜景だけでなく、年中ジャンプの練習風景が見られるようになります。 また、秋のジャンプ大会終了後には、子どもたちや選手で大倉山のクリーンアップを行ったり、伐採後の空き地に植林活動をしたり、小鳥の巣箱を作ったりといった企画も立てています。札幌の財産である大倉山を、競技団体と一緒に札幌市と盛り上げていきたいという状況であります。ぜひご理解いただければと思います。
久慈代理	札幌スケート連盟の久慈です。本日は新保会長の代理で参りました。よろしくお願いいたします。 札幌のスケートの現状ですが、今年、５年ぶりに真駒内の屋外競技場の修理が終わり、２月に全日本ノービス大会を開催できました。その５年間、札

	幌で競技がほとんどできなかったため、競技役員が減少し、選手も激減しました。コロナ前はショートトラックの選手が３～４名まで減りましたが、皆様の活動のおかげで、今は15～16名まで増え、国体で入賞できる選手も育ってきています。 　しかし、北海道全体では約80カ所あるスケートリンクの７割が天然リンクです。私の推測ですが、この数年で温暖化により、５～10年後にはほとんど使えなくなっていくと思います。選手たちは、こうした天然リンクで育ち、帯広や真駒内の400m公認リンクで強化していくのですが、その下地が消えつつあります。札幌では、アスリートの育成が環境が進んでいない状況なので、道庁と札幌市に協力をお願いしながら、選手の発掘・育成を進めていきたいと考えております。よろしくお願いいたします。
伊藤会長	北海道と札幌リュージュ連盟の会長をしております伊藤と申します。よろしくお願いいたします。 　リュージュ競技を取り巻く環境は、先ほど石川会長からもお話がありましたが、活動の中心は藤野リュージュ競技場です。雪と氷を使った造成や維持管理を行い、競技大会や講習会を開催するのが主な活動ですが、昨今の温暖化の進行により、造成や維持管理が大変厳しい状況です。何とか工夫し、ボブスレー＆スケルトン連盟とも協力して講習会や大会を開催しているのが現状です。 　また、連盟自体も指導者や役員の高齢化が進んでおり、若い方の入会がなかなかなく、指導も大変になってきました。競技人口も少なく、体験教室に参加する方は非常に多いのですが、選手として継続してくれる人が少ないのが現状です。 　今後のあり方について検討しているところですが、希望的なお話を申し上げますと、札幌市のジュニアアスリート発掘事業のようなものを、５年ほど前に上部団体である日本ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟が実施しました。札幌市内の小学生に声をかけ体力テストを行ったところ、男子・女子それぞれ１名ずつを発掘し、現在まで重点的に強化するジュニア選手として育成しています。北海道にオリンピック対応のコースがないため、海外遠征で強化している状況です。次のオリンピックには間に合いませんが、その次のオリンピックには出場し、その後にメダルを獲得できればという希望を持っております。 　とにかく、私たちは今ある施設を活用しながら、リュージュの普及活動を中心に行っていきたいと考えております。今後ともご支援よろしくお願いいたします。
小野委員	６月から新任で札幌アイスホッケー連盟の会長を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。 　アイスホッケーの課題は、毎年４月に行う会員更新です。おかげさまで、札幌市のイベントや各チームの努力もあり、会員数は微増しています。釧路

	や苫小牧では選手が減少傾向ですが、札幌だけは若干増えています。本当に感謝しております。 　一番の課題は、先ほどご説明いただいた施設の老朽化です。オリンピック招致が残念ながら見送られ、少しトーンダウンしているようにも見受けられますが、今の施設は大変古く、2030年頃に更新時期を迎えます。日本国内には、国際的なアイスホッケーの開催基準を満たす施設がありません。ですので、ぜひ札幌にその施設を作っていただければ、たくさんの試合を誘致できるのではないかと期待しております。 　候補となっている札幌ドーム周辺の課題も、札幌市さんからお聞きしておりますので、そうした課題を乗り越え、何としても良い施設を作り、そこでたくさんアイスホッケーを観戦していただきたいです。見るスポーツの中では私たちが一番面白いと自負しておりますので、良い施設で競技人口を増やしたいと願っております。引き続き、皆様のご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。
小笠原代理	北海道カーリング協会理事の小笠原です。 　まず、ウインタースポーツに関する取り組みについてですが、「スノースポーツパーク」の素晴らしい背景のもと開催されたことに感銘を受けました。来年２月にはミラノ・コルティナオリンピックがありますので、国内外の方々が多くいらっしゃるのではないかと期待しております。北海道カーリング協会や札幌カーリング協会でも協力するよう指示いたします。 　次に、冬季国際大会誘致についてです。資料にある2015年世界女子カーリング選手権には、私は選手として参加していました。当時、日本での開催は２回目で、青森に続いての開催でした。初めて日本に来る選手や観客が多く、大変好評でした。あれから10年が経ち、今感じるのは、もっと観光客や来訪者の方々に、ジャンプ競技場やアイスホッケー会場など、他の施設もアピールし、「ここはオリンピックの街だ」ということを伝えた方が良かったということです。 　カーリングはアイスホッケーが盛んな国で発展している競技なので、選手もアイスホッケーやジャンプ、バイアスロンを見に行くのが好きです。北欧のチーム選手も施設を巡るツアーなど、おもてなしができれば楽しいだろうと思いました。 　また、今年２月には関東で初めて日本選手権が横浜市で開催されました。横浜市は2029年の世界選手権誘致を考えてくださっています。そこの施設は、アイスリンクではなく体育館で、特殊な冷却シートを貼ってカーリングに特化したアイスメイクを行い、成功しました。今後、札幌市でも世界選手権を誘致する際には、体育館でも開催できる競技だということを念頭に置いていただけると嬉しいです。 　３番目の子どものスポーツ振興については、北海道と札幌のジュニアタレント発掘事業に感謝しております。日本カーリング協会では、タレント発

	掘の予算や人材をつけるキャパがないため、札幌市や北海道の方でご尽力いただいていることに感謝しています。そのおかげもあり、ユースオリンピックでのメダル獲得、世界ジュニアの代表、そして今では日本選手権でメダリストチームに勝つ選手たちも、この事業で育ち、私と一緒に世界を回っています。改めて感謝申し上げます。 　最後に、ウインタースポーツ施設の整備についてです。カーリングは２つ目の施設ということで発言しにくいところもありますが、私が生きている間に札幌に２つ目のカーリング場ができることは夢だと思っていました。月寒のどうぎんカーリングスタジアムが11年前に札幌市が作っていただき、そこから発展することができました。しかし、練習やシートの予約は、倍率が200倍になることも普通で、子どもたちがやりたい気持ちがあってもなかなか叶えられないのが現状です。 　２つ目の施設ができた際には、強化施設としての側面と、観光や子どもたちの普及、インバウンド、市民の皆様への普及という観点で、施設の役割を明確に分ける必要があると考えています。隣のシートでオリンピアンが合宿しているのは良い面もありますが、強化の部分ではデメリットもあるので、そのあたりもお願いしたいです。 　また、立場上発言は難しいですが、カーリングのNTCをぜひ新しい施設か、どちらかに誘致していただき、札幌・北海道から今後もオリンピアンやメダリストが輩出されるように動いていただけたら嬉しく思います。
多田代理	札幌カーリング協会の多田です。会長の代理で参りました。 　札幌の状況で言いますと、北海道も札幌市もカーリングに協力的で、今があると思っております。本当に感謝しております。イベントは非常に好評で、体験会には多くの方が来てくださいます。しかし、体験後に「次もやりたい」となった際、小笠原さんがおっしゃった通り、一般の利用は倍率が100倍になることもあり、稼働率が98％と、なかなか利用できないのが現状です。当協会も普及を謳っていながら、体験してもらうだけで次に繋げられない状況です。 　2030年に月寒体育館の代わりに新施設ができることで、かなり緩和されるのではないかと期待しております。しかし、観光客向けの平日利用となると、指導員の数など、これから整備が必要になってくるので、2030年までに整えなければならないと思っております。 　札幌での取り組みについてお話しますと、数年前から「小学生の放課後カーリング」という事業が始まりました。当初は３年生以上でないと参加できない状況でしたが、今では１年生の子どもたちがペンギンのように氷の上を滑って楽しんでいます。非常に好評で、ここからジュニアスクールへ進む子も出てきています。非常にありがたい事業です。 　また、札幌で育った選手が、今、どうぎんのチームで日本トップのチームに育っていることは、施設ができた成果でもあるのかなと思っています。今

	後も、札幌からメダリストが出るようなことができればいいなと思っております。この会議でカーリング協会として何ができるか分かりませんが、協力していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。
荻野委員	北海道バイアスロン連盟の荻野と申します。 北海道バイアスロン連盟は、強化や育成を行っておりますが、やはり競技人口が少なく、競技へのアクセスが難しいという状況があります。特に銃の関係が影響しています。 バイアスロンの競技場は郊外にあることが多く、冬の道路状況が悪い中では見に来るのをためらう方も多いです。そこで、夏のうちにいかに競技の楽しさを体験してもらうかということを考え、普及事業を行っています。夏に体験してもらい、その体験から「冬もちょっと遠いけど行ってみようか」と思ってもらえるように、オールシーズンで普及を進めております。 特に、ライフルを使う射撃というゲーム性の強さを活かし、今後はeスポーツやバーチャルスポーツと連携して、冬や夏など場所を選ばない形でアクセスしやすい事業を起こしていきたいと考えており、日本バイアスロン連盟とも連携して検討を進めています。 次世代の子どもたちへの取り組みとしては、教育現場で授業を行う機会が昨年からあり、バイアスロンをツールにして、心身の総合的な関係を考えてもらっています。バイアスロン競技を体育館で行い、どうすればパフォーマンスが上がるかを、理科や体育の観点から学生に考えてもらい、仮説を検証する授業です。今年で２年目になりますが、札幌の開成中等教育学校の中学３年生を対象に展開しており、年に５回ほど実施しています。毎回50人ほどが参加する人気の授業で、射撃が当たる方法や持久力を上げる方法などをディスカッションする中で、バイアスロンがツールとしてうまく取り上げられていることに感謝しています。 こうした授業を通じて競技を知ってくれた子どもたちが、体験会や練習に足を運んでくれることにもつながってきており、様々な領域とつながりながらスポーツを展開していくことに手応えを感じています。今後もよろしくお願いいたします。
出口委員	札幌バイアスロン連盟の出口です。 札幌市や北海道庁には、バイアスロンの知名度を上げるために、イベントに呼んでいただいたり、体験会を開催させていただいたりし、本当にありがとうございます。この場をお借りしてお礼を申し上げます。 私たちの競技団体は非常に小さく、日本連盟の本部が札幌にあります。道連も近くにあり、私が札幌連盟の会長も兼ねていますので、風通しが良く、日本連盟の考えがすぐに札幌の連盟まで伝わるため、事業が進みやすい状況にあります。 例えば、スキー連盟さんの真似をしてバッジテストを導入し、子どもたちへの普及を進めています。また、2015年に道庁さんが実施されたタレント発

	掘事業で選ばれた子どもたちが、10年経った今、ナショナルチームに入ってきています。火薬銃を撃てない年齢から、レーザーライフルを使って強化し、ナショナルチームに入ってきたという実績ができたことは、私たちの自信になりました。これを全国的に普及させ、夏も冬もできる国体種目にしていきたいと、日本バイアスロン連盟としても考えています。 札幌市にお願いしたいのは、レーザーライフルをいつでもどこでも使える場所を提供していただきたいということです。専用施設がないことは私たちの弱みです。競技団体が自分たちの施設をもち、そこで強化できるのが理想ですが、まだそこまで至っていませんので、札幌市で、バイアスロンを体験できる場所を少しずつ作っていただきたいです。 もう一つ、ご紹介させていただきたいのが、先月、IBU（国際バイアスロン連合）の委託を受けて、札幌市で「コーチアカデミー」を開催いたしました。これは、IBUが競技発展のために世界的に指導者を作っていこうという事業の一環で、初めて札幌で実施することができました。その際、IBUの責任者から「ぜひアジアでバイアスロン選手権をやってください」と依頼を受けました。早ければ来年にでも実行に移したいと考えておりますので、その際には札幌市の皆様にご指導、ご協力をいただきたいと思っております。ありがとうございました。
髙野委員	北海道スポーツ協会で専務理事をしております、髙野でございます。この会議に関連して、３点お話したいと思います。 １点目は、この連絡会議についてです。第１回目の会議の時にも、世界的な大会誘致に向けて、国内の大会を重ねて進めていこうという話がありました。この会議は、札幌市と道庁が共同事務局だと伺っています。札幌市にはスポーツコミッションがありますが、これを進めるにあたっては、道内各地に拠点があるスケートやスキーのことも含め、北海道全体を視野に入れた「北海道スポーツコミッション」を検討されてはいかがかと思います。 ２点目は、国民スポーツ大会についてです。国民スポーツ大会は、今年度から今後のあり方について議論され、一定の結論が出ました。冬季競技については、開催地の負担が非常に小さくなっています。スケートなどの施設を自治体が持っている場合、その改修費が大きな問題になりますが、国民スポーツ大会の開催にあたっては、国からの支援（冬季国体であれば約５億円）が得られることもあり、検討する余地があると思います。また、国民スポーツ大会の改革の中には、トップ選手の参加や開催時期の柔軟化、特定の場所での開催を進めていくことが盛り込まれています。特に冬季競技は、ジャンプ競技など開催できる都道府県が限られます。今年の山形でのスキー大会では、雪不足に悩まされました。こうしたことを考えると、冬季大会すべてを開催できる北海道は大きな利点です。国体を通じての強化は、特に少年の部では重要ですので、ぜひ検討いただければと思います。 ３点目は、強化拠点についてです。NTCの冬季版誘致は、札幌市さんも単

	独で国に要望を上げていただいていると思いますが、この会議の中で一つにまとまって議論を進めていただければと思います。特に今年の酷暑を考えると、東京のNTCの強化拠点も、北海道にサテライトを設ける可能性もあるのではないかと思います。 それに関連して、北海道スポーツ協会が運営する「北海きたえーる」内の測定室は、NTCの連携強化施設として認定を受けており、バイアスロンや女子ジャンプ選手などが、NTCに行かなくても測定できる体制が整っています。 また、北海道、札幌市、札幌医科大学、北海道スポーツ協会で「北海道スポーツ医・科学コンソーシアム」を設立し、強化に関して医科学的なトレーニングを提供できる体制も整っています。こうしたことを軸に、NTC誘致に弾みをつけていただきたいと思います。酷暑がキーワードとなり、チャンスになるのではないかと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。
鈴木委員	札幌市スポーツ協会の鈴木でございます。各団体の皆様におかれましては、日頃から当協会の各種事業にご理解とご協力をいただき、感謝申し上げます。 先ほど札幌市の金谷部長からもお話がありましたが、当協会では「札幌ジュニアアスリート発掘育成事業」を行っております。事業の内容はご説明いただいた通りですが、今年度は事業費拡充に向けて、パートナー企業からの協賛に力を入れております。また、つどーむ内にクラブハウスを設立するため、初めてクラウドファンディングに挑戦したところ、7月末で目標金額の100万円に達しました。 本事業は、現在のジュニアアスリートが将来トップアスリートとして活躍し、地元に戻って指導者として活躍するという「セカンドキャリア」を促進する、息の長い取り組みです。この目的達成には、各競技団体の皆様のご理解と連携が必要となります。札幌市全体でアスリートを育てていく取り組みに、引き続きご協力をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。
武田代理	北海道障がい者スポーツ協会、本日佐藤会長の代理で出席しております武田と申します。よろしくお願いいたします。 私どもの冬季競技は、「北海道障がい者冬季スポーツ大会」として、スキーの大回転競技とクロスカントリー競技を同時に開催する大会を実施しております。障害のクラス分けのほか、各選手の競技力によって出場ランクが選べるようになっており、障がい者冬季競技に取り組む上で、入門に最適な大会だと考えております。 かつてはピーク時に300名ほどの参加者がありましたが、コロナ禍以降は約50名前後で推移しています。引き続き参加者増を図っていきたいと思います。大会は道内の各市町村に依頼する形で、お受けいただいた市町村に実行委員会を設けて開催しています。しかし、近年はなかなかお受けいただけ

	ない状況が続いており、開催地の競技団体の皆様のご協力によって実現しているのが現状です。 　人口減により、道東や道北の遠隔地では参加者数に大きく影響するため、近年は札幌や旭川近郊の市町村での開催を目指しています。 　パラリンピックと国際大会についてですが、NF（国内競技連盟）の強化育成に指定されている選手が道内にも少なからずいらっしゃいます。近年目立つのは、日本パラスポーツ協会主催の「ジャパンライジングスタープロジェクト」です。オリンピック競技でも実施されていると伺っておりますが、これによって、アイスホッケーやノルディックスキーで育成強化に指定される選手が多く出ています。 　こうした連携を図りつつ、選手が望む競技にそのまま進める環境が北海道にないという課題もあります。そうした問題を解決する一つの手段として、この「ジャパンライジングスタープロジェクト」がなるのではないかと考えております。既存の大会も、こうしたプロジェクトにつながる大会として育てていきたいと思います。引き続き、皆様のご協力よろしくお願いいたします。
浅香委員	札幌市障がい者スポーツ協会の浅香と申します。日頃、障がい者スポーツにご支援、ご協力いただき、厚く感謝申し上げます。 　私どもの団体は法人化して20数年になりますが、「裾野の拡大」を大きな目標として活動してきました。しかし、コロナの影響が非常に大きく、２～３年集まって運動ができない状況が続き、今でも半分程度しか戻っていない状況です。 　この数カ月で既存のクラブやサークルを50クラブほど対象に郵送で調査したところ、３～４割が解散したようで、封書が戻ってきたり、電話が通じなかったりした状況にあります。コロナが障がい者にとっては大きな問題だったのかなと思っています。 　そうは言っても、「スノースポーツパーク」は来年で５回目の開催になると思います。パラスポーツ競技もたくさんの種目を取り入れていただいておりますので、ぜひこの事業が根付き、継続していただけるよう切に願っております。私からは以上です。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。
千葉代理	北海道スケート連盟の専務理事兼副会長を仰せつかっております、千葉でございます。本日は会長が公務で来られませんので、代理で参加いたしました。 　あまり時間がありませんので、全体的なお話だけしたいと思います。おそらく、ウインタースポーツ全体で競技人口が激減しているのが現実だと思います。その理由は少子化もありますが、子どもたちの選択肢が非常に増えていることも大きいと思います。昔は雪が少なくて寒い地域はスケート、雪が多い地域はスキーという選択肢がありましたが、今は夏のスポーツを含め、子どもたちにとって選択肢が非常に増えています。

	また、専門性が高くなりすぎてしまい、小さい頃に夏のスポーツを選ぶと、一年中そのスポーツしかしない、他のスポーツを経験しない子どもたちが非常に多いと感じます。昔は夏に野球やサッカー、冬にスキーやアイスホッケーをやる選手がたくさんいて、そこから強くなっていった選手もいましたが、今は小さい頃から一つのスポーツに決めてしまうと、通年でそのスポーツしかできない状況になってきていると思います。 もう一つは、価値観が変わってきたことです。冬季スポーツは「寒い」「苦しい」「つらい」というイメージが先行してしまいます。逆に、寒くなく、きつくなく、つらくないスポーツは人数が増えているかもしれません。スピードスケートなどは典型的に厳しい状況です。 こうした状況を踏まえ、このような会議でみんなで知恵を絞り、協力していくことが大切だと思います。ウインタースポーツは、なんといっても北海道と札幌が支えていると思いますし、全国、そして世界のトップにいるのは、やはり北海道や札幌出身者です。みんなで知恵を出し合いながら、活性化・振興していくことが大切だと思います。 まとめのような形になりましたが、以上でございます。
勝木会長	ありがとうございました。札幌スキー連盟の立場としては、先ほど原田会長からお話がありましたので、重複を避けたいと思います。他にどうしてもこれだけは言っておきたいというご意見がある方がいらっしゃいましたら、挙手をお願いしたいのですが、よろしいでしょうか。 なければ、奥村局長から最後に一言お願いします。
奥村局長	様々な団体の方々から、ご意見を頂戴しました。本当にありがとうございます。時間が限られておりますので、個別のコメントに対してお答えすることはできませんが、今後もそれぞれの競技団体と密にコミュニケーションをとらせていただき、議論していきたいと考えております。 施設に関するご要望も多くありました。もちろん、老朽化への対応を含め、着実に進めていかなければならないと認識しております。ただ、施設の整備は、裾野拡大などのソフト面と表裏一体の関係にあります。今、子どもの人口が大変減っている中で、どう裾野を拡大し、魅力的な競技の情報を発信していくかが大変重要だと思います。 私も「発信」がキーワードだと思っています。行政としてもできることはやっていかなければなりませんが、やはり主役は競技団体の皆様、そしてアスリートの皆様だと思っております。来年はオリンピック・パラリンピックもありますし、発信や魅力発信の大きなチャンスです。その延長として、施設の利用方法も含めた発信が本当に大事だと思っております。 そういった部分では、逆に我々から皆様へのお願いという形になりますが、そうした取り組みを一緒になってしっかり進めていくことが、この会議の取り組みを将来につなげていくキーワードになるのではないかと思います。これからも議論をさせていただければと思っております。ありがとうご

	ざいます。
７　閉　　会	
枝元課長	本日は気温が高い中、長時間のご議論をいただき、本当にありがとうございました。今後も奥村局長から申し上げましたように、関係者の皆様方と協力しながら、ウインタースポーツの発展に向けて引き続き取り組んでまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。 以上をもちまして、会議を終了させていただきます。本日は本当にありがとうございました。